

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

## 会話が快い家

月一回のこのエッセイも、早いもので二〇〇回目を迎えた。初めの書き出しから八年余り。リフォームの世界がどんどん広がったおかげと、折々の読者の皆様の声に励まされ「リフォームをめぐる人々」のテーマで尽きずに書き続けることができた。この八年でもっとも変わった住まいづくりはなんだろう？ やはり作り手も住まい手も、環境と性能を意識した暮らしづくりをし始めたということだろうか。

家を建て替えずにリフォームで検討する方が増えたことは、ストックの活用時代に省資源といふことからマッチしている。「省エネ・耐震・バリアフリーはリフォームでどこまで出来るの？」と住まい手から聞いてこられることも多く、その質問が出ることで自体が、大きな時代の変化だと感じている。

ところで皆さんは、NHKの朝ドラ「とと姉ちゃん」を見ていらっしゃるだろうか。戦後、女学校の女性教師が水場もない雨漏りのする六畳ほどの物置に間借りして住んでいた時の事、そ

の教師は恥ずかしがらずに元生徒を我が家に招き入れた。しかし、書道家である夫は「こんなところに呼んだのか！」とムツとして出て行ってしまった。このシーンでは夫は男の沽券に關わると思ったのだろうが、通常は女性が「こんな家では人を呼ぶのは恥ずかしい、人をお招きできる家に住みたい」とおっしゃる。私はこの女性教師が好きだ。話をよく聞き、最後には「わかりました！」といさぎよく、はっきりとしたものの言い方で相手の意見を取り入れる。この度量の広さがどんな家に住んでいるなどといふこと以前に、お互いの精神が通じ合う会話を築しむ時間を大切にできるのだと、見ていてすっきりとした気持ちになった。

心を通じた会話は、場所を選ばないと私も先日経験した。時折仕事を一緒に一緒にさせていただいた方からリフォームのご相談を受け、当社一本でのご指名で着工まで進んだ。実際に自分で図面を引くことのなくなった私には、進捗状況が気になる。今回は築年数がたつていると、一階の全面改装です。

大工工事の工程が終わりかけた頃、現場の納まり確認と何よりもご家族がどうされているかが心配で現場に向かった。するとご主人様と奥様が元気に笑顔で迎えてくださりホッとした。ユニットバスがセットされたものの、台所もない現場での生活は、なかなか大変なはずだ。だが久しぶりにお会いしたリタイア後のご主人様と、初めてではあるが話題の豊富な奥様との話は弾み、柱や梁がむき出しで椅子もテーブルもない空間の中、立ったまま二時間もお話をしてみました。

心地よい家づくりとは何なのだろうか。インテリアとそれにあつた家具・調度品もだが、そこで過ごす人々がどんな気持ちで会話を楽しめるかといふことが最も大事なのだと思う。

さて、一〇〇回を迎え、いつまで書き続けることになるか分かりませんが、今まで読み続けてくださった皆様へ心より感謝申し上げます。



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。